

制度を乗り越えて一つ屋根の下で ～八幡平の地で共生型グループホームに挑戦～

グループ ホーム 探訪

第49回

～ようこそ、
わが家へ～

草原の中に桜が咲く



今回のホーム

NPO法人 里・つむぎ八幡平 共生型グループホーム 白山の里

住所 ● 岩手県八幡平市田頭 12-94-1
定員 ● 高齢者9人(1ユニット) / 障がい者5人
理事長 ● 高橋和人



広い空にコイが泳ぐ



ご利用者を真近に支援したい

NPO法人 里・つむぎ八幡平の高橋和人理事長（61歳）は、高校の野球部で白球を追っていた。大学を終えてからは、インテリア関係の会社を興す。その後42歳の時に会社をたたんで、外の世界に流浪の旅に出た。2年後、野球部の先輩が特養を立ち上げるということで、高橋理事長に声が掛かった。介護、福祉の経験はまったくなかった。しかし、「先輩の声掛け」と「時との出会い」が、高橋理事長を新たな世界に押し出した。

特養は半年後に開設した。高橋理事長は、事務長に就いた。ここで5年間勤務する。しかし、特養の大規模経営の介護に馴染めなかった。ご利用者と介護者との間が遠い。時間に追われて、認知症の利用者の声を聴く時間もなかなか取れなかった。次第に、あせりにも似た感覚を抱くようになった。さらに、夜勤の時に、利用者が自分の部屋で一人で泣いている姿にも出会った。「寄り添い、かかわりの深いケアができないだろうか」。ケアの在り方を模索した。

そのような日々の中、母親の認知症が進んでいた。見守りが必要になった。「母親の介助」と模索している「もっとかかわりの深い介護」を同時に可能とする道を探った。

答えは出た。実家を改装して、宅老所の開設を決心した。日本財団の地域福祉拠点整備事業からの補助金940万円を改装資金に充てた。運転資金600万円も借り入れた。こうして、2011年4月に宅老所里・つむぎが開所した。東北大震災の年のことであった。

2012年、第6期福祉整備計画が動き始めた。高橋理事長も動いた。目指したのは共生型グループホームの開設。きっかけは新聞で読んだ障がい児の母親の言葉である。「もし、私が介護を受けるようになったら、この子はどうすればよいのでしょうか」。胸にこたえた。

高橋理事長は「認知症の高齢者と障がい児者が一つ屋根の下で暮らせる家庭をつくりたい」と考えた。しかし、認知症グループホームと障がい児者のためのグループホームは、前者は介護保険法、後者は自立支援法と異なる法制度の下にあった。

2012年11月には、八幡平市よりグループホーム設置の内示を受けたが、法律の壁に阻まれ、目指す「共生型グループホーム」の形はなかなか認められない。建物は別棟、リビング・ダイニングも別にと求められた。

「一つ屋根の下に」という理想を貫くには、法律の壁は高かった。その中で、何を貫くか。他県の実態や



高橋和人理事長

情報、資料を集めて、市と交渉を続けながら、落としどころを求めた。

前例を探した。当時共生型グループホームは宮城県の浅野知事の下で推進されていた。2013年9月には見学にも行った。見学先の理事長には「共生型は取り組む価値がある。何とか実現させてほしい」と激励を受けた。

同年10月には、富山県の、共生型グループホームの開設を認めるために改定された条例を入手。八幡平市に提出し、理解を求めた。八幡平市との協議の結果、1階は高齢者のための認知症グループホーム、2階は障がい児者のためのグループホームの形が認められた。

ところで、グループホーム白山の里の土地は父親の所有であったが、開設には約1億円が掛かった。整備補助金3,600万円、残りは借入である。借入れには、宅老所の運営が順調で、しかも“断らない姿勢”が地域に受け入れられ、役所にも認められたことが追い風となった。また、宅老所を訪ねてきた人を断らないという姿勢も、大きかった。

2014年4月に共生型グループホーム白山の里は、岩手県内初の事業所として誕生した。

ところで、高橋理事長の職員採用の視点である。「作業や業務が得意であることは求めています。人の心に敏感でコミュニケーションを楽しめる人。他人と協力をすることを厭わない人、そういう人材を求めています」(高橋理事長)

人としての尊厳を守る／高館正子管理者

高館正子
高齢管理者



高館正子さん(56歳)は製造業の会社で事務や現場の仕事をしてきた。その間結婚をして、2人の男児に恵まれた。子育ての中でヘルパー2級を取得し、訪問介護を経験した。やがて、母親に介護が必要となった。仕事と介護の両立を求めた。家の近くで開設のため職員を募集していたグループホーム白山の里の存在を知った。開設準備からの入職となった。

それから8年、高館さんは、共生型グループホーム白山の里の高齢管理者である。現在、入居者9人の平均年齢は88.6歳。最高年齢は95歳である。歩行状態は、独歩4人、手引き1人、車いす・手引き1人、車いす2人、歩行器1人である。

他方、職員は、高齢管理者である高館さんを含めて11人。看護師1人、介護福祉士5人、ヘルパー2級3人、無資格者2人。開設からの勤続者が7人いる。

一方、2階の入居者は68歳が一番の年長者である。1階のリビングとは、自由に往来できており、この若い入居者たちが、高齢者の車いすを押したり、配膳などを手伝ってくれる。一方、1階の高齢者は、障がい児者を温かく見守っている。

高館さんはあるご夫婦のエピソードを語った。入居しているおばあちゃんに、お爺ちゃんが毎日自転車で面会にくる。面会では、おじいちゃんはおばあちゃんに、「この数字はいくつ?」と話し掛ける。計算の練習である。しかし、この面会もコロナで中断された

ところで、高館管理者は新しく入ってきた職員に、介護の基本を次のように話している。

「お母さん、おばあちゃんのような年齢であっても、ご入居者は単なる肉親ではない。人間としての尊厳を守って距離感を持ってほしい」。

入職以来7年になる現在、介護福祉士の資格も取得して、心機一転。「今、ご飯食べたばかりなのに……」と笑いながら、余裕をもって仕事を続ける。

「人に添う」空間づくりを気張らずに／八重畑裕子サービス管理者

八重畑裕子
サービス管理



八重畑裕子さん(43歳)は、1階入居者9人のケアプランと2階の障がい児者のプランもつくるサービス管理者である。介護系の大学を卒業。県北の社会医福祉協議会に社会福祉士として就職した。その後介護の現場に入ったが、この時期は非常勤職員の賃金が低く、いろいろな職場を経験した。

ただ、ケアマネジャーの資格はすでに取得しており、その資格を活かして働く場合が少なくなかった。そして、ケアマネジャーとして何回か訪問した宅老所里・つむぎに入職する。働いてみてアット・ホームな雰囲気、猫と一緒に生活しているのが気に入った。

入職後、共生型グループホームを設立する計画を知らされた。制度の違いが乗り越えられるか少なからず不安はあったが、富山県に前例もあることであり、「流れに任せよう」と度胸よく異動を受け入れた。

当時、共生型グループホーム白山の里には、介護経験者は高橋理事長を含めて3人。八重畑さんは認知症

介護の経験は多かったが、リーダーシップを取るのは得意ではない。その点がきつかったという。

さらには、障がい児者への対応である。「障がい」ととらえるのか、「個性」ととらえるのか。どのように接すればよいのか、悩みは少なくない。時には落ち込んだりもした。

7年目にして、「障がいのある人を『病気』というくくりでは見ることはできない。認知症高齢者も一人ひとり違うが、障がい児者も一人ひとり違う。自分も毎日の体調が違う場合もある」との結論に達した。

「毎日起きる些細なトラブルにどう対処しようか。頑張りすぎて、落ち込むこともありましたが。しかし、ふと、『私は過保護になっている』と、管理をしようとしている傲慢さに気がついたのです。生きている限りは自然体でいこうと、がんばるのをやめました」と話す。現在は、ご利用者一人ひとりの動きを見て、その人の行動の理由を掘り起こす作業をしているという。

八重畑さんが職員に求める介護は、基本的な接遇を学ぶこと。利用者を第一に、職員には理念に近づく教育をしていくことが今後の課題である。

今年皆でしたいことは「花見」。日常でご利用者に人気のある手伝はリンゴの皮むき、食器拭き。2階のご利用者は、食事づくりを共同で行うことである。「人に添って」を心に刻んで進む。

仲介的立ち位置として／去石一副主任

去石一さん（61歳）はグループホーム白山の里の開設と同時に入職した。それ以前は印刷や広告代理店の仕事をした。しかし、自分には向いていない気がした。広告の仕事をとおして知り合った高橋理事長に相談すると、共生型グループホーム開設の企画中であり、「やってみないか」と誘われて入職した。介護に対する予備知識は全くない。したがって先入観もない。仕事には自然体で入ることができた。

現在の立ち位置は、管理者の高館さん、八重畑さんの補佐役を担っている。入職して、看取りも経験した。入職してこれまで10例くらいの看取りに立ち合った。最初は緊張したが、看取り期を迎えた入居者はごく自然に穏やかに息を引き取った。今では、死を自然のこととして受け入れることができるようになった。



去石一副主任



クリスマス会は一階も二階の利用者も全員がそれぞれ役割を持ってつくり上げる楽しい行事である

グループホーム白山の里の行事で盛り上がるのは、「クリスマス会」だ。2階の若い入居者も混ざって、にぎやかに行われる。この点も共生型グループホームのよさであり、特徴だと去石さんは語った。

身体にいい“半農半介護”のグループホーム

共生型グループホーム白山の里は、認知症介護が必要な高齢者も、障害のある方も、そして、時に職員がわが子を白山の里に連れてきて、一緒に過ごす。猫と犬も加わっての日常生活である。

高橋理事長はグループホーム白山の里の介護を「ゲリラ介護」と言う。いわゆるこぼれ落ちる人たちの少しでもお役に立ちたいという想いの現れである。「私たちがお役に立てるのはわずか数人に対してかもしれませんが、地道に取り組んでいくしかないと思います」と高橋理事長。

2022年4月には理念を新たに「共生（ともいき）でつむぐ笑顔と安心の里づくり」とした。リーダーを中心に職員、利用者、ご家族、地域の方の誰もが理解できる言葉で表した理念である。

今後は、さらにそれぞれの役割を持って楽しく暮らせる空間づくりを目指す。そのための仕掛けをつくっていききたいとも考えている。

農業法人をつくり自分たちで米をつくり、野菜を栽培する。現在、オーガニック栽培にも取り組み始めた。2016年築100年の古民家を改築して始めた「古民家デイサービス」の建物を、さらに改築して開始した食堂の経営もその一翼を担う。

入居の高齢者の方々に、グループホーム白山の里で、低農薬でつくった米や野菜を食べてもらい長生きしてもらおう。そして、ちょっと変わった福祉施設だけ、地域に開放された法人を目指していきたい。

高橋理事長の農業と福祉、そして地域との連携を強めた里づくり構想は、確実に形になりつつある。

（取材／谷口 要）